

2024年6月9日 No. 3723

先週の講壇から

“愛は惜しみなく”

コリントの信徒への手紙Ⅱ 第9章6節～15節

聖句「各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。」(9:7)

1. 《物惜しみする》 榎本保郎牧師は、招かれた教会で、財布の中身を全て献げてしまい、帰りの汽車賃を無心したことが何度もあったそうです。信仰の純粋さから美談として語られますが、本人や家族にとっては失敗談です。私も席上献金を出す段になって、万札を崩すのを忘れて「しまった！」と呟くことが何度もあります。それは「物惜しみする心」であって「献身の姿勢」とは違います。神さまの御前に立っては居らず、自分の現実しか見ようとしていないのです。
2. 《惜しまれる事》 「物惜しみ」は金銭に限りません。私たちには、直ちに自分の評価や利益に繋がらない事柄に対しては「労を惜しむ」「労を厭う」傾向があります。赤の他人のために骨を折ることは「骨折り損」としか思われられないのです。近年は「手間を惜しむ」傾向も強まり、料理もレンチンが主流です。銀行や郵便局では処理をATMがしているのに、高い「手数料」を取っています。「料理」の「理」は「ことわり／物事の筋道」です。手を加え、手数を掛け、手間を取ることで初めて道理が見えて来るのです。「詩編」90編に「我らの手の業を堅からしめ給え」とありますが、益々「手の働き」を疎かにする社会に向かっています。それ故「道理が引っ込み、無理が通る」ように成っているのでしょう。
3. 《惜しむべき命》 スピードの出し過ぎ等で交通事故が絶えません。寸暇（僅かな時間）を惜しんで、自分や他人の命は惜しまないのかと、コラムに書いた記者がいました。どこかで私たちは道を誤ってしまい、本当に惜しまなければならない大切なものを捨て置いているのです。「愛」と書いて「愛しい」と読みます。即ち、愛は「いと惜しむ」ことです。私たちは何を惜しんでいるのでしょうか。惜しむべきを惜しまず、取るに足らない事を惜しんではないのでしょうか。自分の所有物や金品よりも、立場や仕事よりも、人の命を「惜しい」と考えて行動する生き方が求められます。神は惜しまず与える人を愛されるのです。なぜなら、神は愛だからです。「神は、その独り子をお与えになった程に、世を愛された」のです。そんな神の愛に連なって行く時、神は私たちの近くに臨んでくださいます。

朝日研一朗牧師